

未知のエネルギーの処方箋

一、エネルギーを内蔵している卑俗な大衆の持ち物をオノレ自身の錬金術で絵画の王候まで高めること。これは現代の絵画が到達していることです。既に承知のことです。

平面から立体に移行しようとする作家は等しくそこにウソを感じる。これをもう一度思い浮かべてみる必要がある。平面という既成観念から踏み切れないので絵画を大事にするのでその結果タメライとなります。この点のギャップを埋めたのが岡本太郎であり、マルセル・デュシャンというわけです。しかしこれは大した問題ではない。

二、異物を使用する態度を一步進めて立体に移行して行く作家に平面にはなかった別の感動を発見します。それを追究していくといま迄の絵画はあく迄誰かにみせるものであったし、みせて気に入って買って貰うことによって画家の生活は成り立っていたのだ。しかし立体となった場合に事情は著しく異なる。観客者が観客者でなくなる訳だ。作品の中に観客を入れてしまうからだ。実際としては非常な困難が伴うが理想的に作品が出来るならば作品の中に人間を入れて人間自身の改造を企てることだ。その時作品は観賞という、あってもなくてもよい存在から一挙に哲学の世界へと移行する。しかし、立体といってもその内部に眼を向けられるべきことに気付くだろう。

三、室内としての設置に行くことは作家として理の当然だ。部屋は作者の眼によって実験される試験管なのだ。そこでは実験者にとってハコそのものが大事ではない如くハコの中の即ち室内での観客の動きが一番作者として興味ある存在なのです。入って来た観客が観客でなくなる過程、そして観客でなくなった時観客は作者の場、即ち変革者として我々と一緒に進むこととなります。もうこの辺で大体御了解いただいたと思いますが次は作者または教祖としての眼のあり方が問題であります。

四、当然作者はどの点からそれらをなすかということです。部屋として提出されその中に投げ込むものは一体何物なのか、全世界を見廻わしてもこの問題は提出されていません。むろん解決される苦もありません。まず室内は物質で一応作者の意図を示すことが必要と思われれます。しかしその場合は非常に困難な問題がありますので皆で集合した時よく討論しなくてはなりませんので一応とここでは私自身のプランを提出します。

A. 大きい会場を借り巨大な作品で壁を作ったり宙からつるしたり非常に明確な空間を作り出す(その場合、新興宗教の神殿が全くその逆のことを考えてもらおうと理解しよ)それが会場づくり又舞台づくりとでも呼ぶべきものです。

その中で参加者がトランクか、手に持てる作品を持って参加する。必然的に作者は持参の作品と本人自身の距離を問われ、そこに参加する他人との交流によって自分自身を媒介としての芸術を作る。

B. 詩人は詩人らしい作品で、音楽家らしき作品で、各々が純粹に問われる故現代の混乱を解決することになります。何故なら絵画他の分野との境界線は乱れていますが、その乱れのアヤフヤな所で現代の前衛はアグラをかいていますが我々が意図するこの集会では本職の専門家が集まるので低次のところでの作品は作家自体をつぶすことになります。

C. それこそがこの企画の最大のネライなのです。我々が画家であることを選んだ事を証明する大集会なのです。別の言葉で いえば物自体として問われることです。

五、この集会が成功した場合、人間として存在が根底から問われ人間存在の主張としての本来の芸術の主張が生々と息づくと思えます。この運動が絶対個人では出来ないところに集団としての大きな意味が誕生するのであります。

この度は質疑の討論を徹底的に致したいので昼から集合していただきます。

四月二十二日 日曜日 午後二時 農民会館

時間厳守のこと

提案 九州派事務局

〔注〕 イトカン氏から便りがあっています。美術出版社から広告料を知らせて来ました。

いよいよ『英雄たちの大集会』を迎えるのであるが、まだまだ理解されていないので、パンフと同時にガリ版刷りの『親愛なる皆さまへ』という中で、当日の成り行きを一応図解し、予定行動を示した。要約すると一

まず『世代の自立を宣言する』という項で、「やむなく古いシステムを利用している間はよいが、いつか習慣化されて退化した(ニワトリの方からみて)鶏を進歩したといわざるを得ない画家の喜劇にはソロソロ『サヨナラ』して、われらの時代の幕を開こう。それがミスボラしく、悲しくみえたとしても、そこからしか出発、または零の発見はあり得ないことは確かな事実だ」と決意を促した。そのあと「附録を付ける」「旅費」「宿泊」「名所・旧跡」「収入」「酒」「宣言文」「旅行に慣れない方のために」「グループでの参加は敵迎いたします」「ウララカな九州の太陽はイタリアに匹敵するそうです」「観客がない」から少々抜萃しよう。

実際問題として大集会と銘打っているのでスローガン(明日を告示せよ)の案はあっても、実力や当日の巧妙な運営で否決されるととも採決されぬこともあり、実事それらの連続ではないかと思えます。それに当日の参加者の質と行動によって一切は運営されるわけですから、それこそ参加するアナタが自身で決定する最高のチャンスです。それ故、いまの見てもらおう態度から百八十度回転して、見せる、規定する、告示する、行動させる、要するに「命令する」方に回るか、そうでない場合は「命令」されることを徹底的に欲する奇妙に分裂した二群に分かれる可能性もあります。なにはともあれ観客券というものを発行していません。すべては参加券一本です。それ故、場内は売手だけの闇市場みたいになると思われます。しかし、それ等の売手は、当日、突如として売手自身が、酔させる現在の崩壊と未来の意味を知り、いまこそ、自分自身の意味と価値を知り、色々の・策動、運動の誕生を願うとしたら、当日は偉大な偶発事件の発生となるでしょう。

まさしく、この言葉の好きな連中の集まりとなるものと思われます。しかし頭脳ではそれを欲しても生身の習慣で、それを避けるのが人間の弱い面の日常的美徳であってみれば、そこに大きな個人差が生まれ、それは航空写真でみるように否応なしに色々なものが比較され、それぞれの隠されていたものが素朴に、本質的な批評とはならないだろうか。その落差もさることながら、奇異な行動が好きだという、または、それ等の事件を待ち望んでいる人間にとって、それは、いったい、どういうことを意味するものであろうか。その場合、偶発事件は必然となり偶発性は骨抜きになるのだが.....。

『九州派とは』 まさしく、それ等の好きなグループです。今回の「英雄たちの大集会」の企画も正に九州派が樹てたものですが、運動として、これが起点となると、九州派としては一切介入せず、それぞれ発生、成育されてゆくことを願うのみで、それは運動の先頭には立ちたいが、政治的にはムリをしません。故にこの集会を起点として続々新しいグループと新しい運動の起ることを望むものです。といつて、すべてがそういう人々ばかりでもないのです。それが地方だからといってしまえば、それまでですが、機関誌をよんで頂けば、その辺の事情と幅は判っていただけるものと思えます。しかし、その中にあっても『明日』を告示することには変わらぬ情熱を見せていることは当然です。

「明日の告示とは」少々、言葉としてはオーバーではないかと思っていますが、ただ単に素朴に使用しているわけです。「明日への希望」というように受け取りになっても、いっこうかまいませんが、私達で使用した意味は希望的、楽天的な意味では決してありません。当然、その意味するところは政権交替としての勢力(集団)がある場合、既成勢力を倒して、それに、とって代わろうとする勢力を「明日」と呼ぶわけです。故に底の浅い明日では、強烈なパンチになり得ないのは当然です。「常識的にいって」実存主義の展開とその後の発展、要するに実存主義を越える哲学の確立と、ハーバード・リードの「アイコン

とアイデア以後の、発展的展開を試みるのが常識的前衛というのではないのでしょうか。その範囲では九州派とても 圏外に出るものではありません。常識的前衛なのです。」

「われわれの勢力範囲を強め、われわれの哲学を生みだし、われわれの時代を作る義務があると思います。そうでなくては我々の時代のメシの食い上げになると思います。」

「力のある若いうちに」「お互いを確かめあって叫びを力に変えよう」そのためには、色々の困難が起こり、いろいろの思惑があることも事実です。しかし、その道はイバラであらうとも、バラ色に変え、塗りつぶすべきです。ユカイな万才の気持ちで、ワレワレの力を変えたいと思います。

以上の経過をへて、いよいよ一九六二年十月十五日の「英雄たちの大集会」を迎えた。しかし、その一月前に、ジョンケージ達の前衛音楽家が来て、それ等と交流した音楽グループの、確信にみちたケージ流の演奏に、事実、私達は目をみはらされた。だからといって問題は解決したわけではなく、問題は問題のまま山積したのだが「英雄たちの大集会」はどのように展開したのだろうか。以下報告文—

『英雄たちの